

(18) キャベツ

(ア) 病害

病害虫名及び 防除時期	防除方法及び注意事項
軟腐病  結球初期	耕種的防除 1. 連作を避ける。 2. 排水をよくする。 薬剤防除 1. 薬剤耐性情報（詳細は 261~277 ページ参照） オキシリニック酸剤感受性低下菌：出現している地域がある。 2. 茎葉散布
根こぶ病  は種又は定植 前	耕種的防除 1. 無病土で育苗する。 2. 休眠胞子は土壌中に長期間生存するので、寄主作物を含まない長期 輪作を実施する。 3. 酸度を矯正する（土壌 pH6.5 以上とする）。 4. 排水をよくするとともに、排水の悪い場合（転換畑など）には高畦 栽培を行う。 5. 発病地からの苗の移動は行わない。 6. 病株の抜き取り処分は、病根が腐敗する前に徹底して行い、病原菌 の密度低下に努める。 7. 移植栽培では、育苗中の感染防止に努める。 薬剤防除 1. 全面土壌混和
菌核病 結球初期	薬剤防除 1. 茎葉散布
黒腐病 結球初期	薬剤防除 1. 茎葉散布
株腐病 結球初期	薬剤防除 1. 茎葉散布

(イ) 害虫

病害虫名及び 防除時期	防除方法及び注意事項
アブラムシ類 育苗期後半又 は定植時	薬剤防除 1. 株元散布



病害虫名及び防除時期	防除方法及び注意事項
	<p>なるので、薬剤散布後の効果確認を行い、劣る場合は直ちに他系統の薬剤に切り替える。</p> <p>(4) 食葉性害虫については、次の食害痕や結球部被害指数による簡易モニタリング法を指標として防除の要否を判断する。</p> <p>① 新食害痕とは、切断面がコルク化していない新しいものをさす。孵化直後の幼虫による食害が集中している場合は1 cm<sup>2</sup>の範囲内のものは1個とみなす。</p> <p>② おおむね7日間隔で10株程度調査する。</p> <p>③ 株全体の葉の表面及び裏面を調査し、株当たりの新食害痕が平均1個より多い場合に防除を行う。</p> <p>④ 春まき(5月定植)で新食害痕1に対応する結球部被害指数は、0.4~0.5(10株中4~5株の結球部に食害が認められる)、晩春まき(6月定植)、初夏まき(7月定植)では0.4である。</p> <p>⑤ 好適条件下では急激な密度増加を招くことがあるので、調査間隔を狭めるなど十分留意する。</p> <p>(5) 晩春まき及び初夏まきキャベツは定植時の粒剤処理を行い、その後は要防除水準(新食害痕数1個/株以上)、簡易モニタリング法を活用して茎葉散布を実施する。</p> <p>***ジアミド系薬剤感受性低下個体群に対応したコナガの防除対策***</p> <p>(1) ジアミド系薬剤の使用をコナガの世代内に1回以内とすることで感受性低下リスクを管理できる。</p> <p>(2) 発育零点7.0°C、有効積算温度310日度として推定したコナガの世代日数から、季節と地域毎のジアミド系薬剤の推奨される使用間隔は以下のとおり。</p> <p>5月、6月、7月は全道共通でそれぞれ45日、30日、25日、8月は道東地域で30日、その他の地域で25日、9月は道南地域で30日、道央及び道北地域では45日。</p>
<p>モンシロチョウ</p> <p>定植時</p>	<p>物理的防除</p> <p>1. 光反射性フィルム(近紫外線反射ポリオレフィン系フィルム、シルバーポリフィルム)マルチは、処理後の被害を20日間前後抑制する。</p> <p>薬剤防除</p> <p>1. 植穴土壌混和</p> <p>(1) 光反射性フィルムによるマルチ栽培の併用により、定植後30日前後まで茎葉散布を省くことができる。</p>

病害虫名及び防除時期	防除方法及び注意事項
生育期 6月中旬～及び8月中旬～	<p>(2) 干ばつ条件下では効果が劣ることがあるので、処理後の発生に注意する。</p> <p>2. 茎葉散布</p> <p>(1) 第1回発生：6月中旬～7月下旬、第2回発生：8月中旬～9月中旬</p> <p>(2) 年次変動が大きいので、成虫の飛来、産卵状況を観察し、早期発見に努め、適期防除を行う。</p> <p>(3) 初夏まきキャベツにおける被害許容水準（生育前期＝定植後30～35日）は被害程度で35前後である。</p> <p>(4) 食葉性害虫の防除は、新食害痕を指標に防除の要否を判断する。</p> <p>① 新食害痕とは、切断面がコルク化していない新しいものをさす。孵化直後の幼虫による食害が集中している場合は1cm<sup>2</sup>の範囲内のものは1個とみなす。</p> <p>② おおむね7日間隔で10株程度調査する。</p> <p>③ 株全体の葉の表面及び裏面を調査し、株当たりの新食害痕が平均1個より多い場合に防除を行う。</p> <p>④ 好適条件下では急激な密度増加を招くことがあるので、調査間隔を狭めるなど、十分留意する。</p>
ヨトウガ 定植時 生育期 6月中旬～及び8月中旬～	<p>薬剤防除</p> <p>1. 植穴処理</p> <p>2. 茎葉散布</p> <p>(1) 加害の初期は、葉面が白くかすり状になるので注意する。</p> <p>(2) 老令幼虫は、薬剤に対する抵抗力が大きくなるので早めに防除する。</p> <p>(3) 第1回発生：6月中旬～7月中旬、第2回発生：8月中旬～9月中旬</p>
ネキリムシ類 定植時	<p>薬剤防除</p> <p>1. 作条土壌混和</p> <p>2. 株元散布</p>
ネギアザミウマ	<p>薬剤防除</p> <p>1. 薬剤抵抗性情報（詳細は262～278ページ参照）</p> <p>ピレスロイド系薬剤抵抗性個体群：道内で広く発生が確認されている</p>

病害虫名及び 防除時期	防除方法及び注意事項
	<p>る。</p> <p>2. 結球部被害軽減対策</p> <p>(1) セル苗灌注 クロラントラニリプロール・チアメトキサム水和剤フロアブルのセル苗灌注を行う。</p> <p>(2) 茎葉散布</p> <p>① 定植3週間(21日)後頃から薬剤散布を開始する。</p> <p>② 効果の高い薬剤(スピネトラム水和剤フロアブル、トルフェンピラド乳剤)を同一剤を連用せず、7日間隔で散布する。</p> <p>③ 薬剤散布は収穫7日前、又は本種のほ場内への飛び込みがみられなくなるまで実施する。</p>

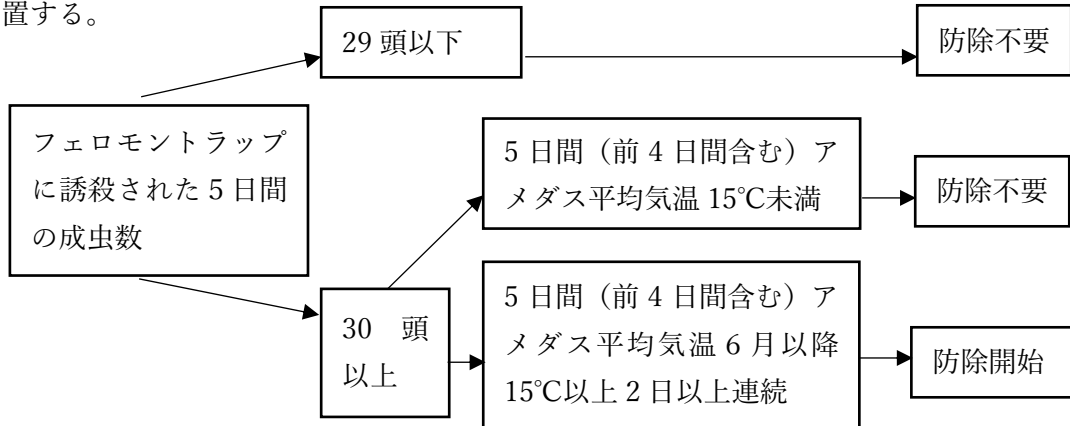
(ウ) クリーン農業技術(病害虫防除関係分)(キャベツ)

- 発生予測システムの活用
  - ・コナガ防除開始時期予測システム ver. 2 の活用
- 発生モニタリングによる効率的防除
  - ・中心部・結球部被害指数 0.4~0.5(10 株中 4~5 株に被害が認められる)を目安とした散布間隔の決定
- 物理的防除
  - ・光反射フィルムと土壌施用剤の併用による食葉性害虫防除の茎葉散布回数削減
- 生物的防除
  - ・生物農薬(非病原性エルベニア・カロトボーラ、BT剤)、天然物由来農薬(スピノサド水和剤)の利用
- 耕種的防除
  - ・輪作による土壌病害(根こぶ病等)の回避
  - ・高畝栽培等での排水改善による病害(根こぶ病)の回避
  - ・土壌酸度の調整による根こぶ病の回避
- 性フェロモンによるコナガの防除
  - ・交信攪乱剤(アルミゲルア・ダイアモルア剤)の利用

※注釈

●コナガ防除開始時期予測システム ver.2 の活用

春まき栽培（5月定植）で適用する。フェロモントラップは防除対象のほ場内に設置する。



●中心部・結球部被害指数 0.4~0.5(10株中4~5株に被害が認められる)を目安とした散布間隔の決定

防除間隔決定には中心・結球部被害指数による簡易モニタリング法を活用する。春まき栽培は発生予測システムで6月から防除を開始し、結球部被害指数 0.4~0.5 で防除時期を決定する。晩春まき、初夏まき栽培は粒剤施用を基本とし、結球部被害指数 0.4~0.5 で防除時期を決定する。害虫の発生量、生育ステージに応じて使用薬剤を選択する。

●光反射フィルムと土壌施用剤の併用による食葉性害虫防除の茎葉散布回数削減

光反射フィルム（紫外線反射ポリオレフィン系フィルム、シルバーポリフィルム）によるマルチ栽培を行うことにより、食葉性害虫（ヨトウガを除く。）の被害を定植後20日前後抑制することができる。さらに、薬剤の植え穴処理と併用することにより、定植後30日程度薬剤の茎葉散布を省くことができる。

ハウス栽培では、紫外線カットフィルム（グローマスター）の利用により、食葉性害虫の忌避、被害防止効果が認められ、薬剤の茎葉散布との併用により効果が高まる。

●土壌酸度の調整による根こぶ病回避

根こぶ病は土壌 pH4.6~6.5 で多発するので、6.5 以上になるよう石灰資材等で調整すると軽減される。

●性フェロモンによるコナガの防除

人工的に性フェロモン物質を放出することで、コナガの交尾を妨害し次世代の発生量を少なくさせる。コナガの幼虫が発生する前にアルミゲルア・ダイアモルア剤を100本/10a設置する。殺虫作用はないので、コナガの幼虫に対する防除は必要である。強風条件や狭い面積での処理では効果が不安定な場合がある。コナガ以外の害虫には効果がないので、防除が必要である。